

然です。先祖の人口は減少の方向に収束される筈であるのに、これは等比級数で無限に拡大してゆきます。

ではどこが間違いか、考えてみました。それは一人の人間に二人の親とした点が問題で、子供は二人の親から平均二人以上とみるべきです。すると、一世代前の人口は、一世代間の平均人口増加率を $\alpha$ 、現在の人口を $\rho$ として  $\rho + (\rho + \alpha)$  となり辻褄があいませす。ちなみに年平均の人口増加率の三百年間の推移は、 $0.3 \sim 0.4 \sim 0.4 \sim 0.5 \sim 0.4 \sim 0.5 \sim 1.0 \sim 1.1 \sim 1.9\%$ 、三百年前の人口は約 $1/6$ で五億強位とか……。

しかしながら、過去の人口遡求のための理論ではなく、血脈をたどるための理論なら、一人に二人の親が存在することは確かに間違いではない。だが、その帰結として、血縁者が無限大になる矛盾はどう理解すればよいでしょうか。

向笠R I会長は、前述の矛盾について充分に考慮された上で、この命題を一つの説話として引用されたものと思います。この話は示唆に富み意外性もあつて、一般の話題としても結構楽しい。私はこの思想ゲームがもっと広く論議されるよう、提唱したい。そして私はそれが、本年のテーマである「人類はひとつ」をふえんするためのよき機縁となるよう、心から期待して一石を投ずる次第です。

## 無限と有限



宿毛 坂本 信

向笠広次R I会長は人類の祖先について十代前は千人、二十代前は百万人、三十代前は十億人となり人類はみな血縁であると説いておられます。確かに一人の人間には父と母と親が二人あり、それぞれの親に、また二人の親がおります。そして $\times 2 =$ 、 $\times 2 =$ と計算器を三十回押すと、間違いなく十億になります。しかし、この論理はどうもおかしい。何故なら結果が不自